

まちの名に 歴史あり

問い合わせ 社会教育課文化財係 (TEL 893・8111)

ほうじ 傍示

傍示とは、札を立てて国境を示したことから付けられた地名で、交野市の傍示は河内国と大和国の国境にあたります。

傍示には交野から奈良へ通じる「かいがけの道」があり、大和と河内を結ぶ重要な通りでした。

また、竜王山の麓には多数の遺跡や古墳群が確認されており、古代からこの道が頻繁に利用されていました。



かいがけの道

この傍示地域に住む人たちの多くは、伊丹姓を名乗っています。言い伝えでは、天正年間(1573～1592年)に摂津国の伊丹城主であった伊丹親興が織田信長に滅ぼされ、残った伊丹一族が交野まで逃げ、この地を安住の地として、住み続けてきたと言われています。

さと きとら 里・北浦

里は、現在の傍示集落から南東部に位置します。伊丹一族が傍示に辿り着くまでに、この土地で生活していた人たちが、この地域を開墾したと考えられます。

傍示は里地域より東側を「東傍示」と呼び、生駒高山を指し、西側を「西傍示」と呼び、これが交野の傍示にあたります。

また、この里の北側を北浦と呼び、里の水田が開かれた後に北山の斜面が開墾されました。浦とは、里の裏側にあたる土地を意味し、北浦と名付けました。読み方は「きたうら」がたまって、「きとら」になったと考えられます。

～ 傍示 ～



こんごうじ 金剛寺

生駒・葛城連峰はかつては役行者の修行場であり、山岳仏教が盛んになる平安時代には各修行場で宿坊が置かれました。



阿弥陀如来立像

鎌倉時代、山岳仏教の修行場を書いた「諸山縁起」には北峰の宿として「石船、師子石屋、金剛、甲尾」と記され、この金剛が傍示の金剛寺にあたります。

竜王山から東には台地状の地形が広がり、寺院のものと思われる瓦が出土しています。国の重要文化財である阿弥陀如来立像(快慶作)が八葉蓮華寺に安置されていることは、金剛寺が修行場として関わっていた可能性を示唆しているのかもしれませんが。

まえがわ 前川

かいがけの道を登りきった平坦地を前川といい、現在の傍示の水田はすべてこの前川に広がっています。この場所の一角を流れる谷川を前川と言い、これが地名の由来になっています。

この川は、前川の北東にある北浦、里、垣内の地域から続き、最終的にこの地域に水が集まってくるようになっています。



前川の水田地帯

